

# 紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 目 次

## 序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉾石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

-日本古代史研究ノートあるいは覚書その2-〔芝池信幸〕 .....	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 .....	243
新聞報道にみる文化財保護25年-新聞記事データベースの作成と利用-〔中川正人〕 .....	252

# 縄文晩期土器棺墓の調査方法について

— 近畿地方の場合 —

中 村 健 二

## 1. はじめに

墓のうち土器を埋葬施設として用いるものを土器棺墓と呼び、その代表として弥生時代の甕棺<sup>(1)</sup>が挙げられる。筆者は、土器棺墓を中心に近畿地方縄文晩期の墓制について述べたことがある。<sup>(1)</sup> その際、基礎資料を作成するにあたり、各報告により精度の差が認められた。そこで、近畿地方縄文晩期の土器棺墓について、どのように調査したり、資料化していく必要があるかという点に留意しまとめてみたい。これらをまとめるに当たって、項目を以下の3点に分けて述べることにした。

①土器棺そのものについて ②土器棺を埋設する遺構について ③骨類について

## 2. 土器棺について

土器棺そのものがもつ属性には、土器棺使用法、土器棺の埋設方法、穿孔の有無、使用される土器の種類などがある。近畿地方の縄文晩期にみられる土器棺使用法は、後期のそれに比べて複雑である。前稿では、これらを8類に分類し、その分布より近畿地方の中での地域性について明らかにした。そして、これらの違いについて出自を表すものと考えた。<sup>(2)</sup> 資料をこの分類に当てはめる上で、先入観で報告書が書かれているのではないかと感じられる場合があった。その代表的例が合わせ口土器棺である。筆者は、第1図のうち、Gのような同一器種（深鉢）の土器の口縁部を合わせものについて合わせ口としている。合わせ口についてFのようなものも含めて呼称している研究者も存在している。<sup>(3)</sup> いずれの立場に立つにしても、土器の口縁部同志を合わせたものについてのみ、合わせ口土器棺という用語を与えている。<sup>(4)</sup>

では、先入観で判断されているとは、どういうことであろうか。最も多いのは、2個体の土器が出土したら、短絡的に合わせ口としていることである。先に、述べたように土器の口縁部同志

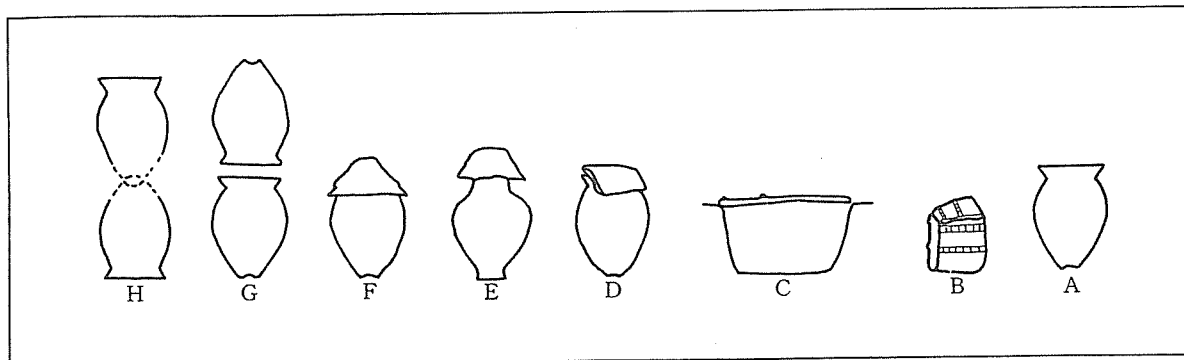


図1 土器棺使用法（註1の下の文献より）

合、第1図D～Hの各タイプの可能性が考えられるのである。最近調査された滋賀県伊吹町杉沢<sup>(5)</sup>遺跡の土器棺墓は、こういった点を判断する上で訓練になる素材である。2個体の土器が存在し、1個体は口縁部まである土器を水平に置き、もう1個体を合わせ口のような状態で蓋にしている。しかし、これらは、合わせ口ではなく、蓋にする側の土器を打ち欠き、1つの破片で主棺に蓋を被せ、残りの破片も残余処理として、その蓋の上に被せている(第2図)。著者の分類ではD類に属している。

杉沢遺跡にみられるように晩期の土器棺墓は、土器を割り、その破片を蓋にしたり、棺本体に

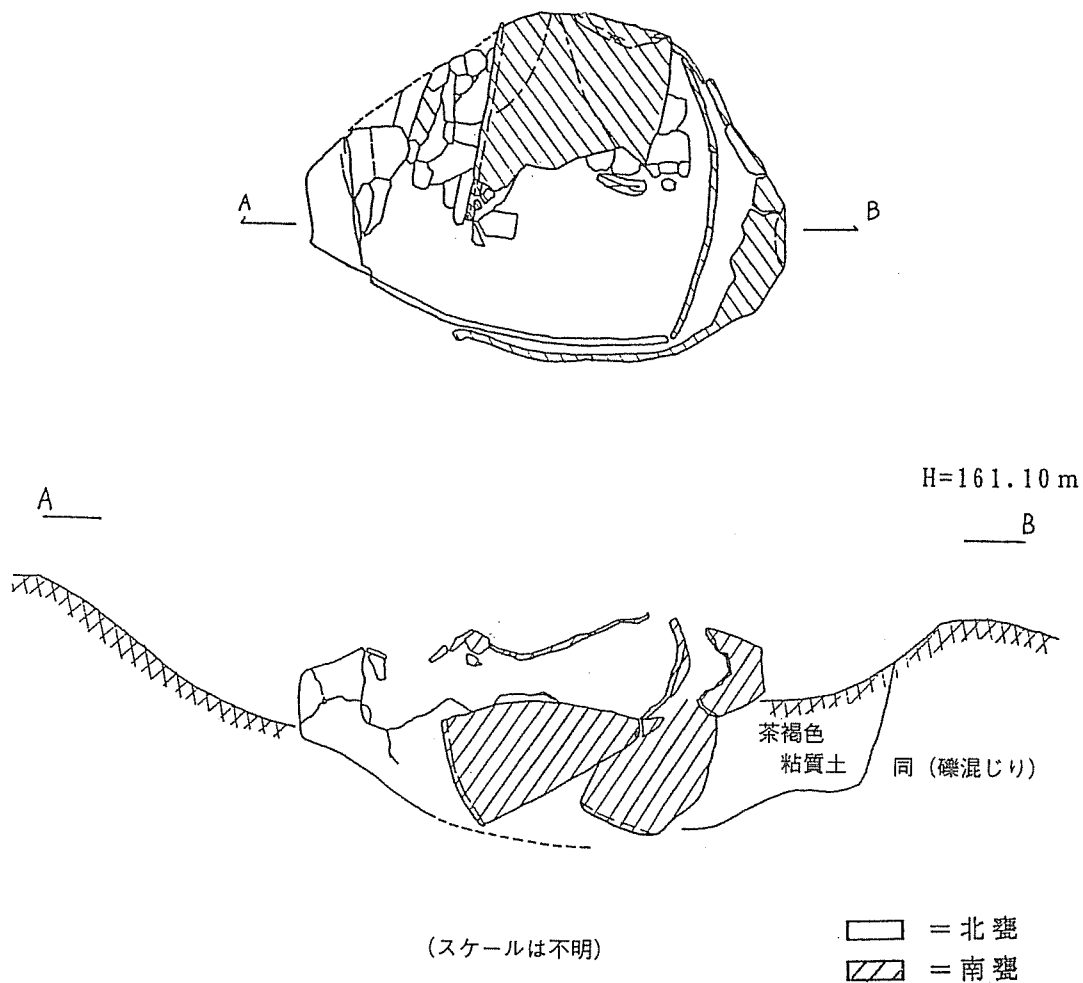


図2 杉沢遺跡土器棺墓(註4の文献を一部改変して使用)

使用したりする例が非常に多い。こうした割る行為や底部打ち欠きなどは、埋設直前に行われているようである。さらに、割られた破片の一部や打ち欠かれた底部は、遺跡内外に持ち出されて発見することができない。土器の出土状況の詳細な観察は、土器棺使用法の種類を明確にするばかりでなく、こういった葬送儀礼への接近も可能にしてくれる。合わせ口土器棺を例に土器棺使用法の分類における誤りの侵しやすい点に述べた。以下、具体的に調査時にどのような項目が必要かを箇条書きにする。

①使用される土器は、1個体か複数か。

- ②それらの土器は完形か一部の土器片のみか。
- ③口縁部同志を合わせたものか、あるいは土器片で蓋をしたものか、これら以外の方法で行われているものか。
- ④穿孔や底部あるいは口縁部等の打ち欠きはあるのか。これらの打ち欠かれた破片は同遺構内にあるのか、あるいは別の場所にあるのか。
- ⑤どのような状態で埋められているか。もしくは、置かれているのか（立位、横位など）。
- ⑥棺に使用されている土器は、近畿地方に主体的に分布している土器か。

### 3. 土器棺を埋設する遺構について

土器棺を埋設する穴については、土器棺より一周り程大きい穴、土坑とよばれる土器棺墓よりもかなり大きいものに大きく分けられる。ここで、取上げて検討するのは、最初の土器棺より一周り程大きい穴である。これは、最も普遍的で報告例も一番多い。筆者も同様の遺構を調査した際、上述のような穴であると報告していた。報告しながら、これは本当に掘り方なのかという思いもあり、他の遺跡の調査担当者に質問すると二通りの答えが返ってきた。一つは、土器よりもやや大きめの穴を使用しているという答えであり、もう一つは穴はわからないという答えである。前者の場合、明確な例もあるであろう。しかし、土器を確認してはじめて穴を探す場合、穴はあるはずだという先入観の基に調査している可能性を含んでいる。

著者も経験した中で、土器棺の周り約1～2 cmに微妙な土色の違いが認められ、それを土器棺を埋設する穴であると認識したことがある。その後、再考し、いくら土器の大きさと変わらない穴を掘るにしても、これほどピッタリと設計図を引いたような穴を掘るだろうか<sup>(6)</sup>と考えるようになった。このように考えれば、土色の違いは別の要因に求められるであろう。いずれにしても、土の色の違い以外に、土の質などを含めた総合的な情報を基準に判断していく必要がある。

逆に穴が確認できない場合は、どのように解釈すれば良いのだろうか。一つは、埋設したのではなく、生活面に置いていることが想定でき、土器棺墓の確認面より下に生活面が存在したことになる。もう一つは、穴を掘削した後、土器棺を埋設し、すぐに埋め戻したため、結果として穴が確認できないということである。これについては、著者も経験から実際の発掘技術では、確認できないほうが多いのではないかと考えている。わからないものはわからないものとして評価し、どのような調査を行った結果、わからなかったのかを明確にしさえすれば良いのではなからうか。

### 4. 骨類について

土器棺墓の性格を決定づける遺物に人骨がある。棺の中から人骨が出土すれば、ほぼその土器は埋葬施設として間違いないだろう。しかし、近畿地方の土器棺墓では、そういった例はほとんどなく、出土しても骨片程度である。骨片は細片化したものが多く、すでに人骨か獣骨かの判断できない例が多いのは確かである。人骨か獣骨かが判断できれば申し分ない。仮に判断できなく

ても、焼けているかどうかということは、骨片の情報として重要である。

最近、報告された福井県成仏・木原町遺跡では、土器棺墓や土坑、包含層から多くの骨片が出土し、それらは成人および未成年の焼けた骨であるという<sup>(7)</sup>。筆者も近畿地方の土器棺墓および土坑墓出土の骨片を観察する機会を数度得て、白色を呈した焼骨が意外に多いと感じていた。骨は、低温の火力で焦茶色から黒色になり、高温になればなるほど灰色から白色になるようである<sup>(8)</sup>。この変化を頭に入れておけば、色によって大雑把に焼けているか判断は可能である。詳細な骨の検討がなくとも、焼骨であるかどうかは記載してほしい。種別不明の骨でも、周りの遺構の状況から焼骨が人骨である可能性が高ければ、再葬ということが考えられる。土器棺墓の性格を考える上では重要な情報であり、今後蓄積していかなければならない。

## 5. まとめ

近畿地方縄文晩期の土器棺墓を調査する際、どのような情報が最低限度必要か明確にできたのではないと思う。さらに、脂肪酸分析、埋土の水洗選別など必要な調査や情報はまだまだある。今後、今回挙げたような情報が報告書に記載され、蓄積されることを望み結びとしたい。

## 註

- (1) 拙稿「近畿地方における縄文晩期の墓制について」『古代文化』第43巻第1号 1991、拙稿「土器棺墓よみみた近畿地方縄文晩期後半の地域色について」『滋賀考古』第10号 1993
- (2) 註(1)の後論に同じ。
- (3) 坂本嘉弘「埋甕から甕棺へー九州縄文埋甕考一」『古文化談叢』第32号 1994
- (4) 橋口達也氏は合わせ口甕棺の説明で、接口、覆口、挿入（呑口）の3つに細分している。  
橋口達也「あわせぐちかめかん 合わせ口甕棺」『世界考古学辞典』平凡社 1979
- (5) 伊吹町教育委員会「杉沢に埋もれた歴史をさぐる」 1995
- (6) もし、土器より1～2cm程度の大きさの掘り方であるとすれば、土坑を掘るよりもかなり寸法を計画的に掘らなければならない。果たしてそこまで、厳密に掘られているだろうか。
- (7) 森沢佐歳ほか「福井県成仏・木原町遺跡出土の骨について」『金合丸・成仏・木原町遺跡』永平寺町教育委員会 1994
- (8) 西沢寿晃「付章 梨久保遺跡出土骨類について」『梨久保遺跡』長野県岡谷市教育委員会 1986

## 編集後記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年は当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

### 紀要 第9号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668